

RDM教材の試用から 見えてきたこと —千葉大学の場合—

第20回図書館総合展 NIIフォーラム
「広げよう、データライブラリアンの輪」

発表者：千葉大学附属図書館 高木 晃子

本日の内容

1. 自己紹介・今回の教材試用プロジェクト参加の経緯
2. 千葉大参加者からの意見・感想
3. 問題提起／ディスカッションに向けて

自己紹介・ 今回の教材試用プロジェクト参加の経緯

自己紹介

所属：千葉大学附属図書館

普段の仕事：亥鼻分館（医学図書館）のテクニカルサービスなど

入職4年目（西千葉の本館に2年、亥鼻に2年）

⇒今回の試用プロジェクトに参加することになった理由

千葉大学アカデミック・リンク・センター（ALC）と 附属図書館が現在行っていること

これまで 学部学生向けの教育学修支援

+

これから 学部高学年～院生向けの支援への拡充・拡大



研究データは避けて通れない
テーマの1つ

大学院生向けの研究データ管理（RDM）
トレーニングプログラム提供を検討



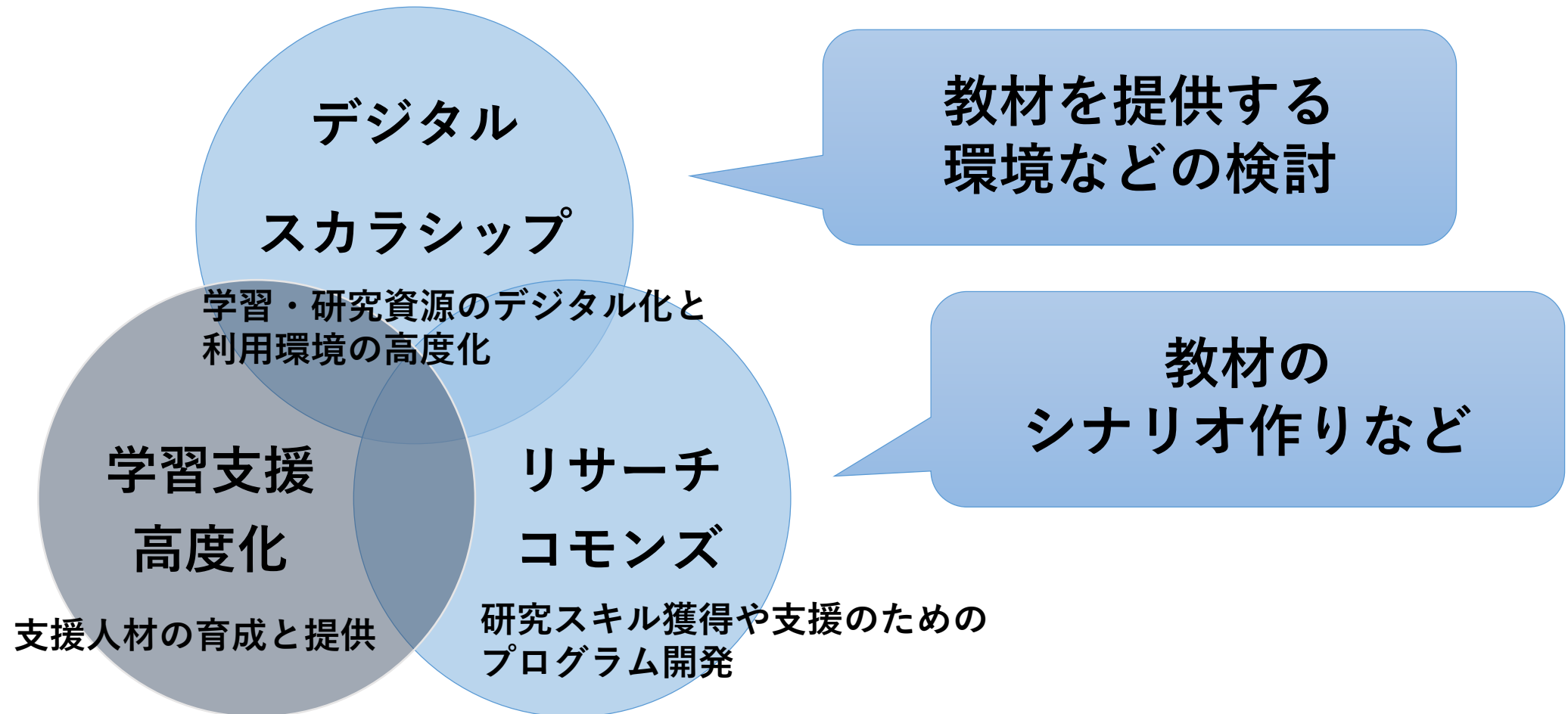
教材の作成・提供と講習会の設計を
進めなくては…



**教材作成の部分では
NIIのRDM教材を参考にしよう！**

教材作成プロジェクトの業務体制

⇒ ALCの2部門による合同プロジェクトとして実施



千葉大からのモニター参加状況

参加者 8名…教材作成の合同プロジェクトメンバー

ALCの教員 3名

図書系職員 4名 図書館管理職 1名

2名が以前のNII提供プログラム

「オープンサイエンス時代の研究データ管理」受講済み

千葉大参加者からの意見・感想

○教材の良かった点

単元の動画コンテンツが5分程度のもものが多く、
単純に見る分には隙間時間に見るのにちょうどよかった。

研究データ管理の全体像が、俯瞰できたような気がします。

△改善してほしい点（内容面）

RDMの意義について教員に説明するときは、
教材で示された説明とは異なるロジックが必要になるのでは
（教材で示されたロジックでは教員に訴求しない？）

公開の可否・ライセンスやメタデータは
「研究後の支援」で取り上げられていたが、
研究中から意識しておくべき事項ではないのか。

個々の内容について、例示であるのか推奨であるのかが
分かりにくい箇所がところどころある

△改善してほしい点（GakuNin LMSの機能面）

動画+音声（スクリプト無し）は、受講できる環境に限られる。
移動中の勉強、適宜読み飛ばしながらの勉強などができない。

動画+スクリプト、音声のみなど受講者の環境に合わせて
複数の方法で受講可能にすると良いのでは。

修了者にどのような教育効果を期待するのか（ゴール）
から逆算して、提供するメディアを決めるとよいのでは？

問題提起／ディスカッションに向けて

問題提起① RDMの意義の説明

今回の教材ではRDMの意義について、

- ① オープンサイエンスの潮流
- ② 研究不正対策
- ③ 助成機関のポリシー（データ管理計画提出の要求）

の3点から主に説明されていた。しかし…

①オープンサイエンスは社会にとってプラスになるが、
研究者自身にとっての利点は見えずらい

②「疑われた時に必要」では、動機付けとして余りに後ろ向き。
研究者としては「今後の研究に役立つか」が気になるのでは

③外部から助成を受ける（主に）理系の研究者だけが
RDMを必要とするわけではないはず



**研究者にRDMを説明するためのロジックを
新たに考える必要があるのでは？**

問題提起② 自機関でのサービス展開

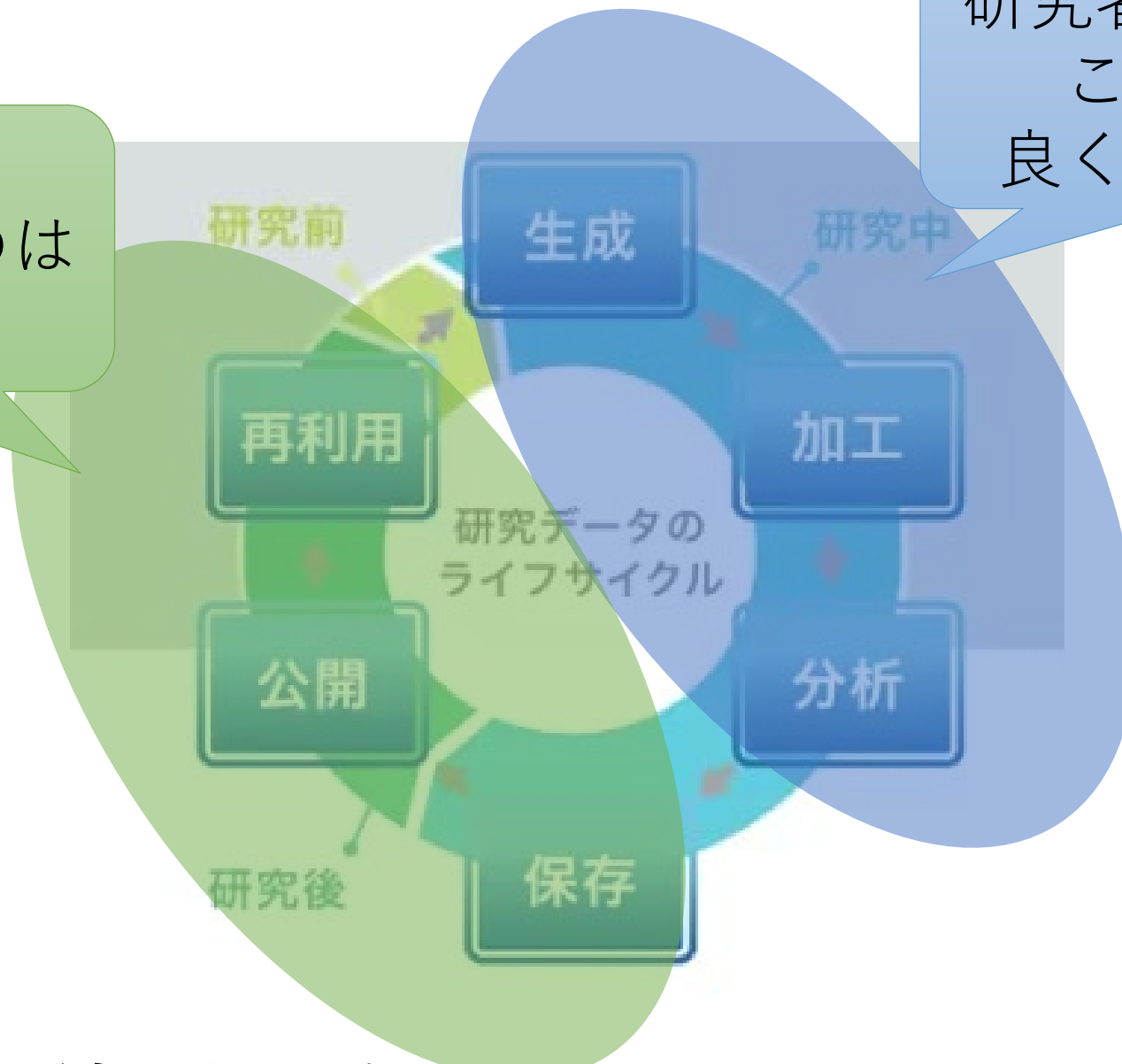
- どんな研究データが自機関内で扱われているか
- それらを適切に管理することでどんなメリットがあるか

…を、自機関内の各研究分野の文脈に沿って
(≡研究者の目線で) 知らなくてはならない



それを知ることが研究者に訴求する第一歩となるはず

図書館員が
今まで見てきたのは
こちら



研究者やURAには
こちら側が
良く見えている

➡ 研究者の目線を知る努力がますます必要となるのでは

ちなみに…千葉大学での実践

リサーチコモンズ部門でインタビュー調査を実施

↑ 研究スキル獲得や支援のためのプログラム開発

- ・ 研究者がデータ管理で困るポイントはどこだろうか？
- ・ 研究を始めたばかりの院生は研究データについてどこまで理解している？ 知らないことは何？

➡ 自機関の実態に合わせたサービス提供にむけた取り組み

最後に：NIIに今後行ってほしいこと

研究者向けのRDM教材や、広報用の資料の拡充

- 研究者向けの説明ロジックのアイデアが欲しい
- RDMナショナルサービスの提供？

RDMに携わる人のネットワーク構築

- 今日のフォーラムをきっかけに、今後継続的に
- 各大学の実践で見えてきた課題を共有できるとよい

ご清聴ありがとうございました